インドネシアの旅
ボロブドールを中心にして

ニューヨーク州立大学
政治学教授　伊藤　博

一九九一年の夏、横浜善光寺の黒田方丈の勧めでインドネシアに三週間訪問することができました。目的はジャワ島中央にある仏教遺跡を見ることでしたが、その他にもスラウエシ島のトラジャ部族の葬儀を見たり、トラジャアラビカコーヒー農園等も視察することができました。

インドネシアの首都ジャカルタとバリ島には十四年前に訪れたことがあるので、ジャカルタでは前と同じホテルに泊ることにし、ホテルの主人にその旨伝えると、大歓迎してくれました。彼の親はオランダ系ユダヤ人で、第二次大戦中は家族全員、日本軍の捕虜収容所に入れられ終戦を迎えたそうです。終戦と同時に暴徒化し、

荒れ狂ったインドネシア人が収容所に押し寄せて来て、無法状態になったのを、日本兵が無防備の女子供を護ってくれたので、日本人を恨めないとも漏らしていました。インドネシア独立後、彼は帰化してホテル業を始めたが、観光産業しかないバリ島の人達に職を与えるだけでなく、ホテル業の教育を受けるためにも、バリの住民を雇い、ホテルの雰囲気もバリ風にしたそうで、彼の性格の一端を垣間見ることができました。

インドネシアは日本以上の人口を持つ国で、しかもその九〇パーセントが回教徒です。ユダヤ教徒はインドネシア全国で五〇人位しかなく、ユダヤ教の教会もなく、牧師もいないそうです。数年前ジャカルタ近郊のユダヤ教徒十数人を集めて、オーストラリアから牧師を招いて、このホテルの一隅で初めての礼拝を行ったそうです。その時の写真や書き物を我々に見せて、熱の籠った調子で、いかにこれから彼の努力でユダヤ教会を作りたいか話しておりました。回教徒以外の宗教に対する政府の弾圧はないが、中近東のアラブとイスラエルの紛争の余波として、インドネシアの回教徒の中にはユダヤ人を敵視する者もいるので、表立って活動はできないし、たとえそれが可能でも、今後それ程ユダヤ教信者が増えることはなかろうとの予想です。

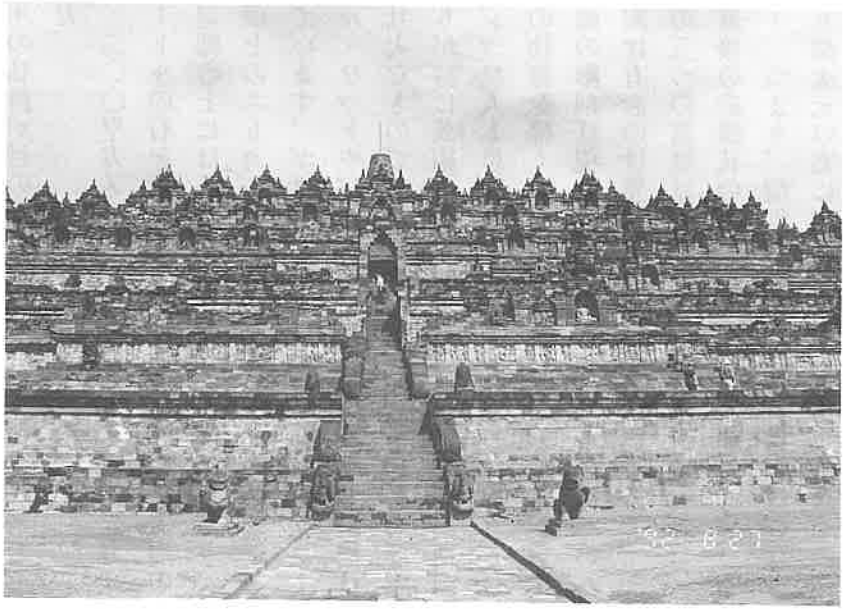
ボロブドールの仏跡

ジャカルタから飛行機で一時間程行くと、日本でしたら京都のような古都ジョクジャカルタに着きます。そこから四〇キロ離れた所に、八世紀後半に建てられたというボロブドールがあります。ボロブドールは丘の上の寺院という意味で、まさしくジャワ中央部のケドマー平野にある小高い丘の上に建ち、高さ三一・五メート

ルの仏跡が目の前に広げるパノラマは圧巻でした。

二〇〇平方メートルの基盤の上に六万立方メートルの石を積み重ねてあり、六つの正方形の廻廊の上には三つの円形の基壇が載っており、頂上のストゥーパには四方からの階段で繋がっています。ボロブドールはその外観もアンコール・ワットやビルマのパガンの寺院群と同様に壮大なものですが、各基壇の側面や廻廊の浮彫りが特に芸術の高さを物語っています。当地のジャワ人と思われるふっくらとした体つきで仏の物語を描く様に彫られています。一番低い廻廊の彫刻は現世の欲望を表わし、次の四つの廻廊は有形の世界で権力の象徴を描いており、次の三つの基壇は無形の世界で無権力を表わし、最後の釣鐘状の大塔は無の世界を表わしています。つまり、現世から始まり、日常の善行はより高次元の姿に変身して報いられ、情欲や欲望

東側から見たところ



の世界での悪行は対次元の変身により罰される
という仏教徒の極楽である涅槃に到達する過程
を一連の絵巻風に石に画いた宇宙の未来への構
想として考案されています。この意味でボロブ
ドールは宗教的にも芸術的にも記念すべき遺跡
だと思います。

全部歩くと五キロもあり、時計の針の方向に
歩くと物語が解るようになっています。狭い通
路を廻ると一五〇〇枚程の石の浮彫りが一千年
前のジャワ人の生活様式をよく描いています。
円形の基壇には七二の仏塔が載っており、その
中には一つづつ仏像が安置されています。特に
仏塔の一つには手を延ばして内部の仏像に触る
と縁起が良いそうで、観光客が沢山仏塔に手を
入れていました。最上段にある仏塔には何も入
っていません。どうして中に仏像が入っていな
いのか、かなり論争されておりますが、一説に
依りますと、その仏塔の側に未だ完成していな

い、目も鼻もない仏像が見つかり、しかもその大きさが調度この仏塔に入る位だったので、多分どの様な顔の仏像にするかを決定しかねて安置しなかったのではないかといわれています。そして、この顔のない仏像は近くの博物館に飾ってあります。又、ボロブドールには全部で五〇〇体の仏像がありますが、その中、二〇二体は頭がなくなっています。真偽の程は別として、地元のガイドの話では頭は特別なものと考えられ、その中に金が隠されていると思われて盗まれたそうです。

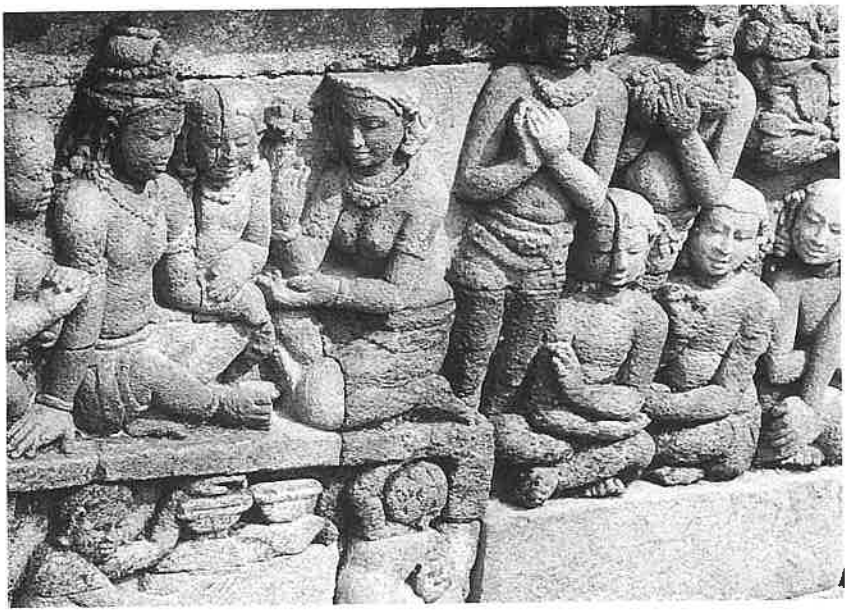
古代インドネシアにいつ、どの様にして仏教と、それよりも古いヒンズー教が入って来たか明らかではありませんが、最古のヒンズー教の絵はスマトラとスラウエシ島で三世紀の物が見つかっています。一つはっきりしている事は、七世紀にスマトラを基点として起ったスリブイジャヤ王国がインドネシア仏教の中心地だった事です。今でもスマトラ島の一部に仏教が残っているそうです。インドのデラマンが貿易商人達に続いて伝道師としてインドネシア半島に入り、サンスクリットを伝えたともいわれていますし、又古代インドネシアの貴族達がインド文化に魅され、しかも、ヒンズー教と仏教の神秘性と秘術の力を借りて、地元の支配階級の政治を裁可するために、デラマンを宮廷に招いて文化の伝道に一段買ったのではないかともいわれています。いずれにしても、日本への仏教の伝来の動機にも似て、インドの宗教（ヒンズー教と仏教）の文化的要素が優れた影響力を及ぼしたのは古代インドネシアの宮廷と政治を司る人達に対してであった事に違いありません。

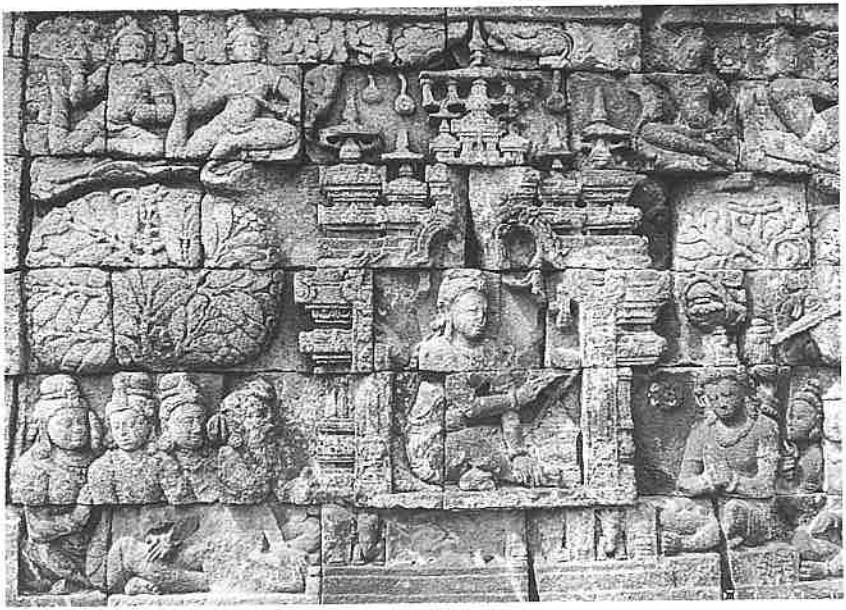
ボロブドールはインド以外の地で見られる一番大きな仏跡ですが、いつ、誰が、どういう目的で建てたかは謎に包まれています。有力な説に依りますと、中央ジャワにあったジャイレン

ドラ王国のサマラツンカ王が、八世紀の後半に建て始め、少なくとも八〇年位かかって彼から三代目の王が仕上げて今の形になったそうです。

エジプトのピラミッドは王家の墓として造られ、メキシコのピラミッドは神に捧げる祈りと生贄の祭壇として使われましたが、ボロブドール遺跡には穴もなく、専ら、柔らかい石を積み重ね、その上に彫刻をした大乗仏教の教えと、祈る目的の為に建てられたといわれています。最上位のストゥーパは修行者が僧侶になる儀式の時使われましたし、ボロブドールを支えていた仏教集団は初期のタントリック教徒か、バジラズナ教徒で、彼等はマンダーラを通り抜ける為に使ったらしいとも考えられています。当時は文字の読める人は極く少数の上層階級に限られていたので、絵物語にして仏の教えを表す事は、仏教普及に大きな意義があったものと考えられます。同じ様な事はイタリアのフィレンツエ（フローレンス）の大寺院の大扉に彫られたキリストの物語にもいえます。大衆伝道の一手段としての役割は大きかったと思われます。ボロブドールは時計の針の方向に廻って各基壇を上って行きますが、階段は小柄なジャワ人にとって、一段一段がとても高くできていますが、ガイドの話では極楽に行き着くのは楽でなく、努力しなければ到達しないという教えが入っているためだそうです。

ボロブドールは西暦一〇〇六年のマラピ山の噴火により破壊された石の多くは河原に飛び散ってしまい、十八世紀まで土の中に埋まっておりました。一八一四年に英国の総督ラフレスが遺跡を発見し、修復に努めました。一九〇七年から四年がかりで、オランダ政府も本格的な修理工事に携わりましたが、それでも排水設備がなかったのと、盛り土の地盤沈下の為、浸食作





用が激しく、一九七三年から十年がかりで、国連のユネスコの援助で基礎工事からやり直し、排水設備としてパイプを入れたり、各段の間に鉛の板を入れたりして、又特別な接着剤で石を貼り合わせ、やっと四三メートルあった遺跡は三一・五メートルの点で沈下が止まりました。この修復工事には日本も参加したそうです。遺跡の囲りには多くの木々が植えられ、公園の様に整然としています。荒野に苔むした遺跡を想像して見に来る人の中には余りきれいに修復されたボロブドールにがっかりする人もありますが、インドネシアだけでなく世界の文化遺産として、毎年何百万人もの人達が見学に来るためには、又後世に永く残すためにも、過剰修復も仕方のない気がしました。

メンデット寺院とパウォン寺院

竹薮の中の寺院という意味のチャンディ・メンデットはボロブドールから東に一キロ程離れた所にあります。ボロブドールが建築学上ストゥーパと呼ばれるのに対してメンデット寺院はチャンディと呼ばれています。チャンディの語源は死の女神からきているともいわれて、仏教の習慣では一種の崇拝の儀式に使われ、ヒンズー教では王や聖人の遺品を保存する神殿として建てられました。ボロブドールと同時期の八世紀後半に建てられ、内部には三つの仏体が安置されています。特に中央の仏体は三メートルもの高さで、いつもの座った姿でなく、両足で立った姿勢でいます。寺院の外側にはヒンズー教とジャワ芸術の最高峰をいく浮彫りがほどこされています。メンデット寺院よりも小さいがボロブドールの一隈をなし、前寺ともいうべきパウォン寺院は灰という意味で、亡くなった仏教徒の宗教上の儀式、おそらく古代王家の葬儀に使われたものと思われます。

私達はこの他にも、プランバナンを始めとするいくつものヒンズー教の遺跡を見て来ましたが、建築や彫刻から見て、ヒンズー教と仏教を区別するのがとても難しいことがしばしばありました。事実、プランバナン寺院もボロブドールより五十年遅い九世紀の中頃に造られており、しかも両者は四〇キロしか離れていない事から見ても、二つの宗教が古代インドネシアの為政者達には現世と後世の目的のため神秘性と秘術を兼ね備えており、互いに類似して見えたものと思われます。

バリ島に残っているヒンズー教も古代原始宗教と混ざっており、インドのものとは全く異っており、インドネシアの国教とも思える回教にしても、中近東、特にイラン回教とは思想・形態が変っています。おそらくスマトラの一部に残っている仏教にも同じ事が言えると思われますが、今から千年もの昔に、ボロブドールの様な違大な遺産を生んだインドネシア半島の人々の宗教心は今でも生きている様な気がしました。二つの宗教を建築学的、芸術的に組合せたのも創造力の豊かさを反映している事になります。

トラジャ部族の葬儀

ヒンズー教や仏教が入って来る前のインドネシアの宗教は先祖崇拝を中心とした自然神を信じる原始宗教でした。しかもプランバナンのヒンズー教やボロブドールの仏教の中にはこの原始宗教が根強く残っており、これ等を区別するのも難しい程でした。私達はジャカルタから飛行機で一時間程でインドネシアの五番目に大きいスラウェシ島、南部の中心地であるウジャンパンダンに行き、そこから乗合バスに十時間程揺られて山岳地帯に住むトラジャ部族の集落に着きました。歴史的には東南アジアの海洋民族

シンノウの花が
春を運んで来た。
三喜龍

が移住して来た人種で、今でも舟型をしたすばらしい家の屋根を特徴としており、死後はこの船で天国に行くという伝説を信じています。トラジャ部族の村はかなり険しい山の中で比較的外の世界から隔離されていたので、部族の八〇パーセントもがオランダの宣教活動でクリスチャンになったにも拘らず、未だに密教的な祖先崇拝を行っています。特に興味があるのは葬儀です。

死者が裕福だったか、社会的地位が高かったかどうかにより規模は異なりますが、典型的な裕福な家族の葬儀を見る事ができました。家族のおじいさんが亡くなったので、遺体を木の箱に入れ、家族と一緒に家に置いてあったそうです。その間、豚か鶏をいけにえとして殺し、密葬を行いましたが、未だ死んだとは看做さないそうです。その家の格に見合った立派な葬式をしないと、死者は天国に行けず、この世に留まって、生きている人々を苦しませると信じていますので、葬式の費用が溜まるまで家の片隅に安置されています。今はホルマリン注射で腐敗を防げるので良いのですが、昔はかなり悪臭がひどかったらしいですが、不愉快な顔でもすると、死者に大変失礼になるといわれたそうです。

家の格に見合ったお金が溜まった時点で、何十頭もの水牛や豚を殺し、何十人、時には何百人もの客に御馳走します。遠来の客には竹の館を造り泊めて持て成します。いけにえにする前には闘牛や闘鶏も行い、毎夜特別な歌と踊りで死者を慰めます。私達もタバコを二ケース買って喪主に贈り、葬儀を見せてもらいました。この儀式は時には一週間以上も続くそうです。

最後に遺体は正式な棺に入れられますが、棺は特別誂えの繊細な見事な色彩と模様に塗られています。そして式場の中心に建てられた特別な櫓の上に祭られ、ここからは悲しみの儀式と

いうよりは、死者が天国に行けるという楽しい行事に変ります。賑やかなお祭りになります。客達の前で水牛の喉を刀のひと振りで切りいけにえがささげられ、後で皆に分けて御馳走します。一番初めに刺された水牛は足を縛っていたロープを切り、私達の方向に突進して来て、危うく惨事を招くところでした。

その後、埋葬の場所へ全員で行列しますが、洞屈の中が普通です。死者の地位が高ければ高い程、人の手の届かない、何者にも荒らされない所に棺を安置します。それから洞屈の外壁に棚を作り、その上に死者の等身大の木彫りの人形を飾り、公式な葬儀が終ります。その後も一週間位家族が入り替り食事や花の供物を持って墓に訪れます。

収穫の後は金銭収入があるためか、我々の行った七月から八月にかけては、この様な立派な儀式を行う家族が多く、道を歩いていても、客のための特別作りの竹の家が目につきました。

又、式に呼ばれた人達が地元のお酒を一メートル以上もある竹筒に入れて何本も背中に担いで行く姿も見かけました。

インドネシアは豊かな資源と文化を持った発展途上国で、日本の対東南アジア政策上、一番力を入れている国です。遅かれ早かれ、インドネシアにも産業化・工業化、そして物質文明の波が押し寄せて来る筈ですが、その時、伝統と歴史の遺産が失われない様に願って、私達はインドネシアを離れました。